様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００９６０

研究課題名（和文）近世仏教教団における触頭制度とその地域的基盤に関する研究

研究課題名（英文）Research on the administrative temple system and its regional foundations in early modern Japanese Buddhist institutions

研究代表者
上野　大輔（UENO, Daisuke）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：９０６３２１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　日本近世の仏教教団における触頭制度（触頭寺院のもとに同じ宗派の寺院を地域ごとに編成した制度）について、加賀藩・長州藩・江戸などの寺院史料をもとに究明を進めることができた。その際、本山や幕藩領主と関係を持つ触頭寺院だけでなく、その地域的基盤をなす寺院組合や講についても究明を進めることで、地縁的に編成・運営された教団の姿を浮き彫りにした。
　また、幕藩領主と教団の関係についても、前者による一方的な支配ではない、政治と宗教の棲み分けを伴う関係として見直しを進めることができた。
　以上の成果を踏まえ、いくつかの学会報告や講演を実施すると共に、論文や図書をまとめることができ、実りある研究期間となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で取り上げた触頭制度は、幕藩領主の支配下での教団運営を成り立たせた重要な要素であり、寺院組合や講などの地域的基盤も視野に入れて検討することで、教団の自律的な運営実態が明らかとなり、幕藩領主と教団の関係についても見直しを進めることができた。
　日本の近世は地縁的共同体が発達した時代であり、関連する村や町の史料が多く伝来し、それらをもとに村や町の自律的な運営実態が明らかにされてきたが、仏教教団もこうした問題と無関係ではないことが一層明確となった。現代社会に生きる私たちが、伝統社会における人々の生き方や政教関係（政治と宗教の関係）をよりよく理解し、踏まえる上でも、本研究は裨益するはずである。

研究成果の概要（英文）：I was able to advance my research on the administrative temple system (furegashira seido) of Buddhist institutions in early modern Japan, based on historical documents from temples in Kaga domain, Choshu domain, and Edo. In doing so, I researched not only the administrative temples connected to the head temple, shogunate and domains, but also the temple associations (kumiai) and confraternities (ko) that formed the regional foundations of the administrative temples. Thereby I highlighted the form of Buddhist institutions that were regionally organized and operated.
I was also able to review the relationship between the feudal lords and Buddhist institutions as a mutual relationship that involved the separation of politics and religion, rather than unilateral domination by the former.
Based on the above results, I gave several conference reports and lectures, compiled papers and books, and had a fulfilling research period.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本史　近世史　仏教史　触頭　組合　講　寺社奉行　真宗

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

かつての研究では、近世の仏教教団は本末制度と寺檀制度を中心に論じられ、幕府による統制が強調されていた。これに対し、近年になって本末・寺檀制度にとどまらない教団の諸制度や、宗派・地域の特性を踏まえた研究が課題とされるようになり、幕藩領主の宗教政策についても再検討が試みられるようになった。

こうした状況を受け、仏教教団の触頭制度について研究を推進できることが再認識されるようになった。触頭とは、本山や幕藩領主が各地の寺院を任命したものであり、本山・幕藩領主の法令などを管轄地域の触下（配下寺院）に伝達し、触下から本山・幕藩領主への願書などを取り次いだ。触頭は、幕藩領主に対する教団の交渉窓口ともなった。一方、触下は近隣寺院同士の結合体である組合を形作る場合があった。門徒の地縁的組織である講が近隣寺院と結合する場合もあった。このような触頭とその地域的基盤である組合・講に関する、新しい研究の必要性が高まった。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、近世仏教教団における触頭制度とその地域的基盤について具体的に究明し、教団が如何に存立したかを問い直すことである。まず触頭寺院の成立状況について、設置主体である本山・幕藩領主との関係を含めて明らかにする。次に、触頭制度の機能について、本山・触頭・触下間の動向や、教団・幕藩領主間の交渉に即して明らかにする。また、組合の形成と展開に関する、各地の基礎的な事実関係を掘り起こす。以上の研究に当たっては、講の動向も視野に収めることとする。

なお、本研究を通じて仏教教団と幕藩領主の関係に即した政教関係論を進展させることも目指している。

## ３．研究の方法

本研究の実施に際しては、触頭であった各地の寺院に伝来した史料群（触頭寺院史料）を読解するという方法に立脚する。特に、北陸地方の真宗の触頭寺院史料は質量共に最も充実した部類に属しており、これらを中心的に用いる。具体的には、加賀藩領の真宗東派の触頭を務めた越中国城端善徳寺や加賀国金沢瑞泉寺などの史料である。また、中国地方（長州藩領）や関東地方（江戸など）の真宗・他宗の寺院史料も活用する。併せて、本山や幕藩領主の史料も活用することで、教団の存立を立体的に把握したい。

## ４．研究成果

### （1）加賀藩における真宗寺院の触頭・組合の成立

加賀藩における真宗寺院の触頭・組合の成立に関する論文を作成した。その際、当初予定していた研究方法を発展させ、城端善徳寺や金沢瑞泉寺の史料にとどまらない、加賀・能登・越中の三国における真宗西派・東派の触頭・組頭寺院の史料を広範に活用することとした。

これにより、17 世紀半ばに加賀藩寺社奉行や東西の本願寺との関係の中で各地の触頭寺院が確定され、触頭配下の組合が広範に成立・機能することとなり、以後に連なる藩・教団間の組織的関係が確立したことを跡付けた。

加賀藩では、金沢の触頭が藩領を全体的に管轄するのではなく、三国にそれぞれ触頭が設置されることとなった。この内の能登では、郡ごとに触頭が設置される形態が典型的に確認される。また、越中の真宗東派触頭は井波瑞泉寺・城端善徳寺の 2 ヶ寺となったため、双方の業務上の調整が課題となり、競合関係も随伴した。

触頭の下部組織とされた組合は、上申下達・意思決定・相互保証・秩序維持その他の場面で機能した。越中の真宗東派のように、触頭が各郡の組頭を設定する一方で組合が細分化された場合は、教団運営上の課題に臨んで、いわば中間の単位として郡レベルでの対応も見られた。

また、17 世紀半ばの前提として、寺院が事実上の触頭の役割を果たした事例を慶長期の史料から確認し、組合の原初的形態と言える寺院・僧侶の地縁的結合についても寛永期の史料から確認した。これらは、戦国期真宗の僧俗が必ずしも分化していない地縁的組織を前提とし、国郡を単位とする領主や本山の統制にも規定されたものと考えられる。こうして加賀藩の真宗寺院の触頭・組合に関する近世前期の推移を把握した。

以上の成果をまとめた論文は概ね完成しており、近く学術雑誌に投稿したい。なお、この成果は、個別の触頭・組合に限定せず、加賀・能登・越中の三国にまたがる広域的な視野のもと、諸事例を関連付けて論じたものであり、藩領の地縁的寺院組織を提示した先端的な研究として位

置付けられよう。

（2）長州藩における寺院の触頭制度とその地域的基盤

真宗西派の録所（上級触頭）である長門国萩清光寺のもとで組頭を務めた同国美祢郡綾木村明林寺に伝来した史料（山口県文書館所蔵）を検討し、論文「長州藩における真宗寺院組合の形成」をまとめ、『山口県地方史研究』第 124 号（2020 年）に発表した。その内容だが、天和 2 年（1682）、清光寺により組合の世話役である組頭が設定されたことが判明し、これを清光寺配下の組合形成の画期と位置付けた。また、それに先立って小寄（小規模な寄合）が定められたが、その内部構成は判然としない。次に、寺院組合の役割として、争論への対処、金品の上納・拠出、使僧の寺院巡回に際しての送迎・賄い、各種の伝達業務などが確認できた。これらを担う組合の自律的性格も指摘した。また、組合の名称には、綾木組などのように村名が用いられるが、その地域的範囲は概ね行政村（年貢納入の単位となる村）より広く、郡や宰判（長州藩の支配区画）より狭いことも分かった。組合の構成寺院は比較的対等な関係にあるが、構成寺院間に本末関係が内包されることがあり、その場合は対等な関係に反する面がある一方、組頭と他の組合寺院の上下関係と対応することで組合運営の円滑化に資する面もあったであろうと指摘した。
続いて、萩清光寺の支配権の成立と展開についても検討し、論文の作成を進めたが、まだ完成には至っていない。この論文を完成させ、学術雑誌に投稿することは、今後の課題である。
一方、山口県編『山口県史』通史編近世（山口県、2022 年）の「第 7 編第 3 章　宗教文化の諸相」を執筆し、長州藩における真言宗・浄土宗・曹洞宗・真宗の触頭制度や、真宗の組合・講、そして長州藩の宗教政策に関する最新の成果を盛り込むことができた。この成果は、自治体史に掲載されたことで、専門家にとどまらない読者を得ることが期待される。

（3）江戸触頭とその地域的基盤

江戸触頭であった浄土宗鎮西派の芝増上寺、臨済宗五山派の芝金地院、真宗西派の築地御坊、そして築地御坊の配下であった麻布善福寺について検討した。その成果の一部は、港区（東京都）編『港区史』第 2 巻・通史編・近世上（港区、2021 年）年）の執筆担当部分（第 3 章第 1・2 節）に反映させた。本書では、幕府の宗教政策を踏まえた上で、江戸触頭としての増上寺や金地院の運営組織などを解説し、新義真言宗・曹洞宗・日蓮宗本門寺派といった他宗の江戸触頭にも言及した。
また、港区（東京都）編『港区史』第 10-1 巻・資料編 2-1・近世（港区、2024 年）の担当部分（第 3 章の概説・第 1 節）では、麻布善福寺・芝金地院・芝増上寺の史料を取り上げ、その内容や伝来状況を解説した。ここで取り上げた史料は、これまで翻刻・刊行されていなかったものであり、それを解説と共に提示したことは、新たな研究成果と言える。この内、麻布善福寺の史料は、文書類を合綴した冊子と法要日記であり、西本願寺教団の運営や、檀家を含む地域住民の動向を知る手がかりとなる。芝金地院の史料は、住持の日記と役者（住持の配下の役僧）の日記、職務関係の記録簿からなり、江戸触頭としての同寺の役割を知るための基本史料となる。芝増上寺の史料は、増上寺御霊屋（徳川家の霊廟）の年番であった恵眼院による幕末期の執務日記である。
なお、『港区史』は紙媒体に加え「デジタル版　港区のあゆみ」というウェブサイトでも公開されているため、専門家を超えた広い読者を得ることが期待される。
一方、築地御坊配下の触口（下級触頭）であった相模国三浦郡野比村最宝寺の触伝達について検討し、論文の作成を進めたが、完成までには更に時間を要する。この論文を完成させ、学術雑誌に投稿することは、今後の課題としたい。

（4）『本興寺文書』の刊行

摂津国尼崎に所在する本興寺は、京都の本能寺と並ぶ法華宗の本山であり、その所蔵史料からは触頭・組合・講の動向についても判明する。これらの史料の内、元禄期から元文期にかけての寺務日記を翻刻した本興寺編『本興寺文書』第 6 巻（清文堂出版、2021 年）の刊行に、監修者の一人として携わった。加えて、元文・寛保期の寺務日記と末寺住職に関する記録簿を翻刻した『本興寺文書』第 7 巻（清文堂出版、近刊予定）の編集にも、監修者の一人として参画した。

（5）近世の政教関係

本研究では、仏教教団と幕藩領主の関係に注目して、近世日本の政教関係をめぐる知見を提示することも目指している。この目的のもと、寺院・僧侶側の動向のみならず、幕藩領主側の動向についても、思想面を含めて検討を進めた。そして、その成果の一部を「近世前期の宗派紛争と政教関係」と題して 2021 年度歴史学研究会大会近世史部会で報告し、『歴史学研究』第 1015 号（2021 年）に発表した。
ここでは特に、近世前期に進展する身分・職分編成と照応した政教の棲み分け（幕藩領主の担う政治的範疇と寺院・僧侶の担う宗教的範疇の棲み分け）について提起したことが重要である。

政教の棲み分け自体は中世にも認められるが、それは政治権力が強大化する近世前期に消滅するのではない。幕藩領主が独自の組織を整え政治支配の論理を掲げる一方、寺院・僧侶は教学を含む独自の職分の担い手として組織化・規律化を遂げ、それを幕藩領主からも命じられたことで、政教の棲み分けは一層明確化すると主張した。これにより、幕藩領主が仏教教団を一方的に支配したというような単純な理解が見直され、政教の棲み分けは当該分野における基本的な知見として継承されることが予想される。なお、以上の議論は、近世の世俗化（政治・経済などの世俗と、宗教との分化）を考えることにもつながる。

（6）研究課題と関わる全体的な歴史像の発信

ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の 2021 年 8 月の国際会議において、ジョン・モリス氏、朴澤直秀氏と共同で、近世日本の仏教教団を再検討するパネル報告を行った。その中で私は、仏教教団の触頭制度とその地域的基盤に関する研究の概要を提示し、海外の研究者と議論する貴重な機会を得た。

また、上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美編『日本近世史入門』（勉誠社、2024 年）の中の「宗教と社会」と題する論考を執筆し、仏教教団の触頭制度とその地域的基盤や、近世の政教関係についても全体像を意識しつつ論じた。本書は専門家以外の読者も想定して編集・刊行されており、広い読者に迎えられている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔 | ４．巻<br>第724号 |
| ２．論文標題<br>〔書評〕小林准士著『日本近世の宗教秩序　―浄土真宗の宗旨をめぐる紛争―』 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>日本史研究 | ６．最初と最後の頁<br>40～47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔 | ４．巻<br>第1015号 |
| ２．論文標題<br>近世前期の宗派紛争と政教関係 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>歴史学研究 | ６．最初と最後の頁<br>68～77 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔 | ４．巻<br>第999号 |
| ２．論文標題<br>〔書評〕芹口真結子『近世仏教の教説と教化』 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>歴史学研究 | ６．最初と最後の頁<br>43～46 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔 | ４．巻<br>第124号 |
| ２．論文標題<br>長州藩における真宗寺院組合の形成　―明林寺文書を手がかりに― | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>山口県地方史研究 | ６．最初と最後の頁<br>1～15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>上野大輔 |
| ２．発表標題<br>近世前期の宗派紛争と政教関係 |
| ３．学会等名<br>歴史学研究会日本近世史部会2021年度大会第2回準備報告会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>上野大輔 |
| ２．発表標題<br>近世前期の宗派紛争と政教関係 |
| ３．学会等名<br>2021年度歴史学研究会大会近世史部会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>上野大輔 |
| ２．発表標題<br>Administrative Temples in Early Modern Japanese Buddhist Institutions: The System and its Regional Foundations |
| ３．学会等名<br>16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>上野大輔 |
| ２．発表標題<br>近世的政教関係をめぐる一考察　―浄土宗・日蓮宗の紛争と江戸幕府― |
| ３．学会等名<br>中近世宗教史研究会第23回オンライン例会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>上野大輔 |
| ２．発表標題<br>近世前期の宗派紛争と政教関係 |
| ３．学会等名<br>歴史学研究会日本近世史部会2021年度大会第1回準備報告会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計6件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔・小林准士（編） | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>吉川弘文館 | ５．総ページ数<br>200 |
| ３．書名<br>日本近世史を見通す6　宗教・思想・文化 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美（編） | ４．発行年<br>2024年 |
| ２．出版社<br>勉誠社 | ５．総ページ数<br>432 |
| ３．書名<br>日本近世史入門　―ようこそ研究の世界へ！― | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>港区（編）（東京都） | ４．発行年<br>2024年 |
| ２．出版社<br>港区（東京都） | ５．総ページ数<br>534 |
| ３．書名<br>港区史　第10-1巻　資料編2-1　近世 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山口県（編） | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>山口県 | ５．総ページ数<br>1128 |
| ３．書名<br>山口県史　通史編近世 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>港区（編）（東京都） | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>港区（東京都） | ５．総ページ数<br>500 |
| ３．書名<br>港区史　第2巻　通史編　近世上 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>本興寺（編）、岩城卓二・上野大輔・幡鎌一弘（監修） | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>清文堂出版 | ５．総ページ数<br>414 |
| ３．書名<br>本興寺文書　第6巻 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

【ホームページ】
慶應義塾研究者情報データベース（K-RIS）
https://k-ris.keio.ac.jp/html/100000142_ja.html
慶應義塾大学文学部史学系日本史学専攻ホームページ
https://sites.google.com/view/keio-flet-jpnhistory/

【アウトリーチ活動】
上野大輔「〔講義〕江戸時代における仏教教団の触頭制度とその地域的基盤」（アーカイブズ講座〈大分県中津市〉、2021年11月27日、Zoomによるオンライン方式）、上野大輔「〔講演〕江戸時代の宗教と社会」（日中友好協会港支部主催文化講座、2021年12月19日）、上野大輔「〔講演〕近世の宗教と社会」（湘南慶友会、2023年6月10日）、上野大輔「〔講演〕近世仏教教団の触頭制度」（湘南慶友会、2023年6月10日）、上野大輔「〔講演〕近世仏教教団の触頭制度とその地域的基盤」（アーカイブズ講座〈大分県中津市〉、2023年8月29日）

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|